



Title	フランス文学批評の研究(I)サント=ブーヴ「ポール・ロワイヤル」
Author(s)	向井, 敏
Citation	Gallia. 1955, 3, p. 92-108
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5331
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス文学批評の研究

向 井 敏

(I) サント=ブーヴ「ポール=ロワイヤル」

はじめに……

以下の文章は、今春提出の修士論文を改稿したものである。ただし、この改稿は、紙数の制約に基づく一つの便宜であって、原論文に対する根本的な補整を必ずしも意味しない。むしろ、要約に近いものである。にもかかわらず、あえて改稿と称したのは、以下の文章を単なる要約にとどめることなく、ただかかる叙述形態を利用することによって、原論文では比較的緊密の度を欠いていた叙述の一貫性をここに得せしめたいという、ひそかな願いによるものであるらしい。

なお、今後の研究を考慮して、総題「フランス文学批評の研究」をあらたに設けた。もっとも、今後の研究を、たとえばある批評方法の授受・発展というような、なんらかの統一的な主題に沿って進めるという考えは、いまのところ、持っていない。したがって、この総題の下に収められるべく予定されている数個の論考は、相互に独立した質のものとなるであろう。

○

(1)

サント=ブーヴは、1834年ごろから研究を続けていたポール=ロワイヤル運動の歴史に関して、1837年11月から翌年5月にかけて、ローザンヌのアカデミーで、前後81回にわたる公開講演を行った。標記「ポール=ロワイヤル」は、この講演を契機として成った作品であり、1840年第1巻、42年第2巻、48年第3巻、59年第4・5巻と、およそ20年の長きにわたって断続的に刊行された。(ただし、現行の諸版は、1867~71年に改編増補されたアシェット版⁽²⁾6巻本一別に索引1巻一を底本とする。)

一般に、この作品はフランス文学批評の古典的傑作の一つとして取り扱わ

れている。しかし、この作品は、元来は、単に文学批評としてでなく、ポール・ロワイヤル⁽³⁾修道院の消長を軸とする一つの宗教史・時代史として構案されたものであり、じじつ、内容的にも、単に文学批評という概念では律しきれぬ、もっと異質な叙述が主となっているのである。したがって、これの考察を文学批評という面にのみ限るならば、作品全体のありかたの理解ということに関して、あるいは適切を欠くに至るおそれなしとしない。必ずしもそのためにはばかりではないが、ここでは、文学批評という点にことさらにこだわらず、もっと巨視的に、この作品の基礎的な構造様式について考えてみようと思う。

(1) Charles-Augustin Sainte-Beuve (1804-1869)

(2) Port-Royal, 7 vol. Hachette.

Histoire de Port-Royal, 10 vol. Ed. de La Connaissance.

Port-Royal, 3 vol. Gallimard (Bib. de la Pléiade).

(3) 13世紀初頭、シュヴルーズ南郊にシトー修道会に属する修道院として創設され、17世紀になってジャンセニスム運動の拠点となり（この間修道院としての機能はパリの新院 Port-Royal de Paris で営まれ、旧院 Port-Royal des champs はいわゆるポール・ロワイヤルの隠士団によって住まわれた。）、1709年、異端のかどをもって閉鎖・破壊された。サント=ブーヴの扱ったのは、17世紀はじめ、アンジェリック=アルノー Jacqueline-Marie-Angélique Arnauld (1591-1661) の改革によって、積年の俗化・退廃を脱してのちの歴史についてである。



概括的に見て、一つの宗教史としてのこの作品は、対象の綵花的平叙によってでなく、対象に対する一種の二元論的考察に基づく叙述によって、そのありかたを規定されていることに、まず注意しよう。すなわち、サント=ブーヴは、ポール・ロワイヤルの修道生活をもって純粹に信仰の本質に関するものとし、その神学体系たるジャンセニスムを眞の信仰にとっては非本質的な一個の理論に帰することにおいて両者を範疇的に分け、しかも、前者を優位的に後者を貶位的に取り扱うことで、叙述を整理する前提とも原理ともしているのである。このことに関して、作品の冒頭に、かれはつぎのように書いている。

「ポール・ロワイヤルとジャンセニスムとは、絶対に同じものではない。ジャンセニスムの歴史家は、ポール・ロワイヤルの歴史家と、なんら相わたる

ところを持たない。(中略) ジャンセニウス⁽¹⁾とその著「アウグスチヌス」⁽²⁾とに源をくむジャンセニズムは、要するに、神学上の一条項にすぎず(中略) われわれの興をよぶに価しない。そこには教義に関する論争がきまっ
て伴なれわていたが、そもそも教義などというものは、信仰に無縁の要素
なのである。さいわい、ポール・ロワイヤルは教義論争と本質を異にしてい
る。しばしば論争の渦中に巻き込まれはした(中略)、しかし、いかなるとき
きでも、修道院・祭壇・隠庵・施物窓・勤行・堅固な魂たちの犯すべから
ざる内生活・質素で静かな学問所、それらがポール・ロワイヤルから奪われ
たことはなかった。その存在は、教義論争によっていささかも乱されはし
なかった。われわれの出発するのは、まさにここからであり、また、たえ
ず顧みようとするのも、ここ⁽³⁾なのである。》

このように立てられた叙述原則がいかに具体化されているか、以下に略観
を試みよう。

さきの注で触れたように、長らく上流階級の子女の単なる寄宿舎にすぎな
いかの観のあったポール・ロワイヤルを、真の修道の場によみがえらせたの
は、時の院長アンジェリック＝アルノーであるが、この改革に際して彼女のと
った行為のうちに、作者は、それなくしてはのちのポール・ロワイヤルがあ
り得なかったであろう信仰精神の原型とも言うべきものを措定している。あ
らゆる俗臭を排し、俗界に対して完全に隔離された状態に生き、いっさいを
あげて神への帰依に応ぜしめんとする、徹底的にストイックな精神がそれで
ある。そして、この作品でサント＝ブーヴのまず関心したことこそ、かかる信
仰精神の具体例をポール・ロワイヤル運動の中に求めることなのであった。
それだけではない。かれは、そこに見いだした信仰の営みを、単なる一地方的
現象としてでなく、およそ信仰なるものの永遠の範型として見るべく、読者
に同意を迫りさえしたのである。いま、信仰宣誓事件におけるジャックリー
ヌ⁽⁴⁾＝パスカル⁽⁴⁾の行為に関する叙述を通じて、このことをたしかめてみよう。

……ポール・ロワイヤルによるジャンセニストと当時の公認教派たるジェ
ズイットとの反目・確執は早くから底流していたが、1649年、前者の意外の
影響力をおそれた後者がジャンセニズムの教典「アウグスチヌス」の教義を

五か条の命題に要約し、これを異端としてローマに提訴するに至って極点に達した。状況はジャンセニストに不利にはたらき、1553年、異端判決が下され、続いてこの判決を是とする信仰宣誓文の副署がルイ14世の名の下に全フランスの僧職者に強要された。命令が実施をみたのは1661年であるが、当時、ポール・ロワイヤルの指導者たちは、五か条の命題はそれ自身としては信仰上異端であるが、事実上「アウグスチヌス」にかかる命題は存しないという、いわゆる信仰問題と事実問題との区別を構え、署名に応じてさしつかえないとの見解をとった。しかし、これに反対する修道女も少なくはなく、その急先鋒を承ったのが、前記ジャックリーヌであった。彼女は指導者の見解を強権との妥協・真理の歪曲と見なし、その私信に、《司教たちが修道女なみの勇気しか持たない以上、わたしたち修道女が司教の勇気を持つべきです。》《わたしたちの役めは、真理を守ることではない、真理のために死ぬこと(5)です。》と書いた。院内では指導者の意見に従うのが規則であったため、結局は彼女も署名に応じはした。が、良心のいたみは、ほどなく彼女をして死に至らしめたのである。また、彼女と意見を同じくしていた兄のブレースは、署名の実施されたとき、真理の冒瀆を嘆いて失神したと伝えられる。(6) 作者は、これらの情景を感動的な筆致で描いたのち、さらに、読者に向かってつぎのように呼びかけるのである。

《真理へのこの限りない愛について考えてみようではないか。なんという精神の偉大さであろう。良心を欺かぬために、死に至るまで、失神に至るまで苦しむる人々の、なんと幸いなことであろう。聖なる苦しみよ。かくも堅固な・かくもゆるぎない叡知にみちた魂の、真理に対するかくも激しく・かくも繊細な・かくも傷つきやすい愛にまさって尊ぶべきものがまたとあろうか。妹はそのために死し、兄はそのために意識を失ったというのだ。(中略)ここにこそ、英雄的でストイックな、みごとなモラルがある。ここにこそ、われわれは、神祕で内的なキリスト教のモラルを、その至純の精髓の形で、とらえるのである。(8)》

なんらかの描写・解説というよりは、浪漫的・自己陶醉的な賛歌に類する叙述。この中に、人は、ことばに対する吟味の不十分・ある必要な論証段階の無視ないし飛躍・あまりにも独断的な断定等を見だし、その叙述態度に

ある種の軽率を指摘するかもしれない。しかし、上のような叙述は、そのために起りうる非難を予想したうえで、しかもなお、作者によって意識的に採用されたと考えてさしつかえないように思われる。というのは、別の個所で、作者は、かかる叙述方式が、前後の状況のいかんでは、とりうる唯一の方式であることを述べて、つぎのように書いているからである。

「自然の愛情におけると同じく、宗教感情にあっても、分析がその意義を失い、優しい心が涙をたたえて姿を現わし、自己忘却・無意識のうちの自己放棄・感動的な自己犠牲の始まるときがある。激情の瞬間・愛に満ちた期待の瞬間・十字架の下の聖なる歓喜の瞬間・マドレーヌや聖テレーズの比類なき英雄的感情の瞬間がそれである。わたしとて、比較観察の精神・厳格な科学精神がこのうえに何かをつけ加えうるであろうことは知っている。しかし、かかるかたくなな分析精神は、いまの場合、無味乾燥で、場違いなもののように思えるのである。⁽⁹⁾」

強弁？ あるいはそうかもしれない。しかし、かかる弁証のしかたの是非はいまは問わずにおこう。ともあれ、かれはかかる叙述方式をもって、その他多くの信仰営為の事例を採録し、結論的に、ポール・ロワイヤルなるものの本質的なありかたを規定して、つぎのように言うのである。

「パスカル・サシ・ランスロ・その他多くの謙譲な人々によって、かくも崇高なしかたで保持された信仰の精神・燃えあがる聖性の観念が、ポール・ロワイヤルに永遠の真理のめざましい光景をもたらさなかったならば、ポール・ロワイヤルのごとき、一個の墳墓たるにすぎなかったであろう。⁽¹⁰⁾」

ところが、他方、ジャンセニズムに対するとき、かれの叙述態度は一変する。浪漫の賛歌は消え、代わって、分析的・批評的というよりも、むしろ感情的・神経的な嫌悪に近い態度が支配的となるのである。ジャンセニズムの教義に、その論争に、かれは一片の宗教的誠実をも見ない。ルイ14世とローマ法王との政争にほんろうされたその悲劇的経歴に同情ないし理解を示すことを拒否する。かれによれば、その悲劇の経歴はみずから招いたものなのである。⁽¹¹⁾大アルノーらジャンセニズムの主要な代弁者たちの行動に、かれの見るものは、俗臭と頑迷と無恥である。「パンセ」⁽¹²⁾に対する熱情的な解説に際

しても、この書とジャンセニスムとの関連をできるだけ見まいとする。ポール-ロワイヤルという、《キリスト教の豊かなみのりの中の、⁽¹³⁾ 生気のない・汚れたあつれきの問題。》これが、ジャンセニスムに対する、サント=ブーヴの前提的かつ最終的な規定なのである。

- (1) Cornelius Jansenius (1585-1638)
- (2) Augustinus (1640)
- (3) Port-Royal, Hachette, t. I, p. 35-6.
- (4) Jacqueline Pascal de Sainte-Euphémie (1625-1661)
- (5) cf. Port-Royal, Hachette, t. III, p. 350.
- (6) Blaise Pascal (1623-1662)
- (7) 信仰宣誓文の副署命令は1661年中に二度出され、二度目のは署名者側における留保条件をいっさい認めないものであった。ブレーズが妹と意見を同じくしたのは二度目の命令が出てからであって、最初は指導者の見解を是認していた。ただし、かれは僧職者ではなかったから、直接署名をしいられはしなかった。
- (8) Port-Royal, Hachette, t. III, p. 356-7.
- (9) *ibid.*, t. V, p. 133.
- (10) *ibid.*, t. III, p. 343.
- (11) Grand (Antoine) Arnauld (1612-1694)
- (12) Pascal; *Pensées*. cf. Port-Royal, t. III, p. 418-466.
- (13) Sainte-Beuve; *Volupté*, Garnier frères, p. 305.



「ポール-ロワイヤル」が資料収集の的確・広範、考証の綿密によって、いまなおポール-ロワイヤル研究上の最良の文献の一つとされていることは、あらためて言うまでもない。しかし、意外に留意されていないのは、その研究方法がこの題目を扱う上での一つの規範となっていることについてである。サント=ブーヴ以後のポール-ロワイヤル研究家であって、問題を前述のように二元に分けて検討するという方式に影響されなかった人はほとんどいないのではなからうか。サント=ブーヴのポール-ロワイヤル観に対する原理的修正⁽¹⁾を目しているらしく思われるアンリ=ブレモンの「フランス宗教感情史」⁽²⁾にして、すでにそうなのである。しかし、このことは、ただちに、かかる研究方法が対象の真に迫るべく最も適していることを示していると考えられることをわれわれに許すものであろうか。必ずしもそうとは思えない。

一般に、それ自体としては一個の有機的総合をなす歴史上のある事態を数個の範疇的命題に分別するという操作は、そうすることによってただ表現の明晰・読解の容易のみを期するためであっても、それらの命題相互間に本来あり得たかも知れないが、かかる操作の実行にとって不都合と見なされた諸項の無視ないしその意義の卑小化、あるいは反対に、それに好都合な諸項の意義の拡張をはらまざるを得ないものである。したがって、かかる操作は、ある決定的段階における総合的判断のための、必要ではあるが、しかし、あくまでも予備的・仮設的・便宜的な質の作業でしかあってはならない。この操作をもって対象理解の主導的方式とするとき、その成果になんらかのひずみのもたらされるであろうことは、けだし、避けがたいのである。いま、サント=ブーヴの対象理解の是非について疑念をさしはさんだのは、かれが、この間の事情について正当な考慮をはらったとは必ずしも思えないからにほかならぬ。

ポール=ロワイヤルを、いちおう、ジャンセニスムに無関係な一つの信仰集団と仮定しよう。しかしこの信仰集団は、最初から非社会的に存在し、かつ、時流に超越して存続したのではない。だいいち、それが過去を負い現在を生きる歴史的人間によって構成されている以上、そういうことはあり得ないのである。それは、なによりも、一つの反教會的宗派であった。すなわち、当時のカトリック正教派たるジェズイット教団の信仰様式を自己の宗教上の信念・感情に反するものとして見だし、それに対抗して、より純粹・より完全な信仰に生きんとする意識的信者から成る一つの宗派だったのである。同じことが、ポール=ロワイヤルから独立した神学体系として見た場合のジャンセニスムについても言える。つまり、これも、アウグスチヌス神学の単なる書齋的一祖述なのではなくて、ジェズイットの神学体系を不純と見るところに発した、宗派的積極を内包する神学体系だったのである。したがって、両者は、既成宗団に対する宗派的反撥という点で成立の精神を等しくするものと考えられ、これをひとしなみに異質と断ずることはためらわれてしかるべきであろう。……ところで、宗派は、その生ずるやただちに、教会正教派によって押しつぶされるか懐柔されるかする危険に当面するものであるが、こ

れを冒して自らの存続を図るために、宗派もまた一つの教会にみずからを組織しようとする。⁽³⁾この場合、教会組織の核ないし旗印となるものは、神学体系であり、教義である。ポール・ロワイヤルも、かかる要求を必然に内包する以上、いずれは、なんらかの神学体系・教義をみずから編み出すか、他から借用するかせねばならなかった。しかし、いずれをもってするにせよ、この宗派の採用すべき神学は、ジャンセニスムか、少なくともそれに近い質のものであるべきであった。というのは、いかなる組織集団でも、その生活様式に合致しないような思想をみずからの信条とすることは生理的に不可能だからである。ポール・ロワイヤルの生活様式は、さきに見たように、いっさいの人間的・地上的享樂ないし自由を神への帰依のうちに窒息せしめることから成る、極端なリゴリズムによって特徴づけられる。かかる宗派にとって、人間生得の自由を認めず、神の恩寵によらざれば救われることを得ずと説くジャンセニスムにまさって、当時、みずからにふさわしい神学思想はなかったのである。ジャンセニスムの側にあっても、これに類似の事情がはたらいていたらしく思われる。ジェズイットが、カズイスティックのような、伝統的信仰概念をも危うくしかねない神学を編み出して、近代化・合理化しつつあった一般の生活様式に信仰を順応させることをしいられた時代に、中世的嚴格をよろったジャンセニスムは、ポール・ロワイヤルのような特殊な生活体を通じてでなければ、一つの実践神学たることを得なかつたろうからである。リゴリズムを軸とする両者の結びつきは、かくて、ほとんど必然的であったと言わねばならない。……このようにして、ひとたび教会組織を持った宗派は、みずからの他と異なるゆえんを強調するために、みずからの真理性を宣明するために、また、みずからの勢力圏の拡大を図るために、あるいは狂信的信仰生活をより強化し、あるいはみずからの教義に執することにおいてよりはなはだしく、既成宗団の教義や信仰様式を攻撃することにおいてより激しくなる。そのかぎりでは、サント=ブーヴによって許しがたいものとされたジャンセニスムの論争精神は、実は、その熱烈な信仰精神と並んで、宗派活動の持つ正常な機能の一つだったのである。

サント=ブーヴは、ポール・ロワイヤルとジャンセニスムとを分断するに当たって、両者の歴史的かつ生理的なかかる結合の体制について必要なだけの

考慮を払わず、もっぱらその差異を洗いたてることにつとめた、少なくとも読者に与える印象はそのようである。言いかえれば、対象を二元的に見ることによって、「ポール・ロワイヤル」に得せしめられた問題解析上のある整齊さは、対象の有機的なありかたについて考量することの無視ないし放棄を代償とするものなのである。

- (1) その主要な修正目標の一つは、サント＝ブーズによって信仰精神・宗教感情の唯一絶対の拠点として非歴史的に範疇化されたポール・ロワイヤルを、宗教感情のフランス的伝統における一里程標として歴史的に相対化することであった。
- (2) Henri Bremond (1855-1932); *Histoire littéraire du Sentiment religieux en France*, 12 vol. Blond et Gay, 1915-1932.
- (3) 宗派については、林達夫「宗教について」(同著「歴史の暮方」収録)参照。



しかし、この二元的論法は、結果的には対象の全幅的解明にとって否定的にはたらきはしたが、始源的には、作者の精神の位相に密着して発想されたものであり、そのかぎりでは他のしかたによっては代替することのできない積極的・絶対的な論法であったことに留意されねばならぬ。

この論法は、叙述の明晰を期するなどという考慮から用いられたのでは決してない。いったい、叙述が体系的・方法的・論理的に秩序だてられていることに由来する表現上の明晰は、サント＝ブーズの作品にきわめて縁遠い要素であり、また、後年⁽¹⁾テーマに刺激されて試みた数編の実験的作品を除けば、かれ自身、かかる要素をその作品に架そうと望んだこともほとんどなかったのである。その叙述の形態は、すぐれて随想的・座談的である。構築的・積層的でなく、平面的・オムニバスのである。集中的・求心的でなく、拡散的・遠心的である。その文体は、一貫した脈絡を顧みず、往々論理的な連関をさえ無視し、その時々⁽¹⁾の印象を追い、感興のおもむくところ⁽²⁾に従って、たえず、蛇行し、曲折し、収縮し、膨張し、飛躍する。その結果するところは、命題の体系的抽象化よりもその修辭的多様化であり、解析よりも描写である。かかる叙述上の特徴は「ポール・ロワイヤル」においてもいかに発揮されているのであって、その叙述について読者の持つ最初の印象は、むしろ小説的暗示の及ぼすそれに近く、けっして批評的明快のそれではあり得ないので

ある。全体としてこの種の叙述が意識的に採用されているにもかかわらず、前記二元論的論法をもって、表現の明晰を期するべく構案されたものとするのは背理であろう。

この論法は、表現上その他、なんらかの概念的な必要に基づいて作為されたものではなく、実は、作者自身の宗教体験についての、あるいは、より広く、人生体験についての主体的な認識から直接に発想されたものなのである。さらに言えば、これは、作者の倫理観・人生観の一つの帰結なのである。このゆえんを知るためには、ここで、「ポール・ロワイヤル」の起案ならびに発表・刊行の間に作者の位置した生活状況を顧みる必要がある。

(1) Hippolyte Taine (1828-1893)

(2) テーヌは、サント=ブーヴの叙述形態とみずからのそれを対比して、前者の批評を創作家的・修辭家的、後者の批評を哲学的・分析家的と規定している。cf. H. Taine ; Préface de la première édition de ses " Essais de Critique et d'Histoire "

サント=ブーヴの生涯ならびにその人生観形成の上でもっとも重要な事件の一つに数えられる信仰探求は、1829年の前後、かれの25歳のころに始まる。かれの関心をこの方向に導く機縁をなしたものとして、当時かれと親交のあったユーゴー夫妻の感化が一般に言われるが、かかる外的原因もさることながら、このことに関しては、かれが宗教的なものに容易に結びつきうるある性向をひそかにみずからのうちにはぐくんできていたという、特異な事情を見のがすわけにはゆかない。晴れた日よりも曇った空を好ましく思う心のかたむき…… サント=ブーヴ研究者の一致して指摘するように、かれは、この種の内的・夢想的な性情を生涯持ち続けていたらしく思われる。ところで、かれが、かかる性情をはじめてみずからに意識したのは、現存の記録の上では、シャトブリアン(2)の小説「ルネ」との出会いにおいてであった。16歳のころ、かれはすでに「ルネ」のうちのみずからの相似像を認め、「ルネ」を読んだ。ぼくはからだ(3)が震えた。そこにはぼくのすべてがあった。と手帳に書きとめている。これが少年一時の感傷にとどまるものでなかったことは、40歳を越えたのちにも同様な告白をあえしていること(4)から察し得よう。この「ルネ」との出会いは、かれにとっては、ほとんど運命的であった。かれは、ルネに象徴される内的性情こそみずからの本性であるという意識からついに脱

することなく、かえって、ますますそれを深めていったのである。青年期の
 終りに当たって、かれは詩集「ジョゼフ＝ドロルムの生活・詩・思想」小説⁽⁵⁾
 「ヴォリュプテ」⁽⁶⁾を公刊したが、そのそれぞれの主人公ジョゼフ・アモーリ
 イの性情は、ルネ的なものに支配されていた当時のかれの内面を精密に復元
 描写したものとされる。それがことに著しいのは、《無気力で無為で移り気な、
 ひっこみじあんで利己的な、神祕的で秘密好みで、繊細すぎるほど夢想的な、
 隋弱に墮さんばかりも柔和な、しかも逸樂的な魂》⁽⁷⁾として描かれたアモーリ
 イにおいてである。作者の性情が作中人物のそれに全く一致するものかどう
 か、もとより論議の余地はあるにしろ、少なくともかれがアモーリイのそれ
 に通ずる性情をみずからにも認めていたことは疑い得ない。しかし、かかる
 性情は、そのまま実生活の場に持ち出されるためにはあまりに非社会的であ
 った。そうでなくてさえ、いわゆる原始の性情は実生活の行動原理に非通約
 的なのが一般である。それは、実生活にあっては常に意志的に抑圧されざる
 を得ない。サント＝ブーヴの場合といえどもこの例外をなすものではなかつ
 た。ここから、一つのコンプレックスがその内心に鬱積していったであろう
 ことは容易に想像される。解毒剤が必要であった。そして、ルネやアモーリ
 イがそうであったように、かれもまた、宗教を、かかるコンプレックスを昇
 華し、心に平安をもたらすべきなにかとしてとらえたのである。

かかる点から見るとき、かれの宗教への接近はその心理の必然と言うべき
 であって、それがたまたまユーゴー夫妻との接触という一つの契機を得て促
 進されたのであるということが理解されよう。かれの場合、宗教的転生のた
 めの超越的啓示の介在というようなことを想定すべきではないし、また、外
 的原因についても必要以上に重視すべきではないように思われる。宗教的転
 生などということば自体、ここでは誇大にすぎよう。それは、水の流れの低
 きにつくように、きわめて自然な質のものであったのだから。

さて、この宗教的関心は、当時の社会環境がかれにとることをしいた現実
 忌避の姿勢によっていっそう強化されることになる。七月革命に引き続く、
 絶えざる政変と動乱。それらを通じて露呈された、人々の抗争・利己心・裏
 切り・追従・頑迷。新聞「グローヴ」の同僚たちの政治熱。かつてかれもそ
 の一員であったロマンチストたちの騒然たる社会的進出。その他、その他。

これらが、元来から行動的でなかったかれに公的舞台にのり出すことを忌む
 思いをいよいよ募らせ、反対に、宗教を通じての自己沈潜にますます没頭せ
 しめたのである。

以降、かれは、その文学活動をも宗教的関心に従属せしめようとする。詩
 集「なぐさめ」⁽⁸⁾小説「ヴォリュプテ」の述作、ポール-ロワイヤルの研究、す
 べてそうである。ことに後者については、その序文の草稿（未定稿）で、研
 究の意図がつぎのように説明されている。

「かれら（ポール-ロワイヤルの人々）のうちに、こんにち、地を払ってい
 る精神的権威の最後にして真実な典型を認め、かれらとの厳粛な交わりによ
 って現代の人々のことを忘れることのできるのはなんとさいわいなこと
 であろう。そして、神の加護のもとに、みずからを鍛え直するべをかれ
 らから学びうるならば、その喜びはいかばかりであろう。」⁽⁹⁾

また、生活上の必要から批評に携わらねばならないことの不満を訴えて、
 1833年1月12日づけラムネエ⁽¹⁰⁾あての手紙につぎのように書いている。

「(批評によりも) 芸術そのものに生きたいとどれほど願っていますこと
 か。ますます強く心を動かす宗教的思索に芸術を結びつけ、詩をもって
 あ⁽¹¹⁾の熱情的な信仰の営み・祈り・渴望に代えたいのです。」

上に述べたようなことだけでなく、人は1830年ごろから35年ごろに至るか
 れの書簡を検することによって、その信仰探求に対する熱意の激しさに関す
 る、より豊富な観念を持つことができるであろう。

(1) cf. Maurice Allem; Sainte-Beuve et "Volupté", chap. III.

(2) François René de Chateaubriand (1768-1848); René (1802).

(3) Les cahiers de Sainte-Beuve. (le passage cité de "Sainte-Beuve et "Volupté"", op.)

(4) cf. Sainte-Beuve; Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'Empire, C. Lévy, t. I, p. 390.

(5) Vie, poésies et pensées de Joséph Delorme (1829)

(6) Volupté (1834)

(7) Préface de "Volupté".

(8) les Consolations (1830)

(9) Oeuvres choisies de Sainte-Beuve, Hatier, p. 299. (le premier projet de Préface a été retrouvé par Gustave Michaut et publié par lui dans son "Sainte-Beuve avant les Lundis")

(10) Félicité Robert de Lamennais (1782-1854)

(11) Correspondance générale de Sainte-Beuve, Stock, t. I, p. 334.

しかし、この熱意にもかかわらず、かれは信仰生活について徹し得なかったのである。……最初、かれが宗教に求めたものは、心の悩みに対する《もっともひそかな、もっとも親近ななぐさめ》⁽¹⁾であった。その願いを満たすに足る教会を求めて、それというのも宗教は現実には必ず教會的形態を備えてゐるからであるが、かれは、サン=シモニスム・ラムネエの自由主義キリスト教などの新宗派や、伝統的カトリック諸派を遍歴し、また、歴史上の諸流派をも研究した。しかし、それら諸教会にかれの見たものは、魂の救いによりも教義・典礼・伝統によってみずからをよろうことに専念し、信仰の一途に耽溺するよりも外的にみずからを拡張することを望み、また、みずからの真理性を誇って相互に争いあう、そのかぎりでは俗界と同一の生活法則に貫ぬかれた営為であった。かれの理想視する信仰と現実のそれとの間には、越えたい障壁があったのである。実際にはもっと多様な要因が、もっと複雑にまたらきはしたであろうが、少なくともこのことが主因となって、かれは、教会宗教を通じてはみずからの願いを満たすに足らぬことを自覚するに至り、836年末ごろ、信仰探求を不断の日常的義務とすることから、ついにみずからを解除した⁽²⁾のである。

内的な気質の人が宗教にさえみずからのよりどころとするものを見いだす事なかつたとき、かれは、往々世上いっさいの現象に対してことさらに傍觀的・懐疑的な態度をみずからに擬そうとする。そうでなくてさえ、人はある年齢に達するとかつての浪漫的熱狂に嫌悪ないし幻滅を感じ、一種の諦観的冷静をもって事に臨もうとするものである。1837年以降、サント=ブーヴの内部にもかかる心理のメカニズムが抗しがたくはたらいたもののように思われる。数年を経て、かれは、つぎのような告白をあえてするに至るのである。

《わたしは、純粹の批判的知性の状態にはいった自分を感じ、悲痛なまなざしで自分の心の死に立ち会っています。わたしは自分で自分をさばき、冷静で無関心な態度を持っています。わたしは、死人です。しかも、わたしは、この死んだ自分を、なんの感動を覚えることも心を乱すこともなく、ただ見おろしているのです。》⁽³⁾

したがて、われわれは、かれがその晩年の生活を原則的にはかかる態度におい

て展開し、政治的にも、思想的にも、また文学的にもつとめて中立的であろうとするのを見ることができよう。⁽⁴⁾

(1) cf. Préface des “ Consolations ”.

(2) cf. Lettre à Eustache Barbe, 1^{er} oct. 1836. (Correspondance générale de Sainte-Beuve, t. II, p. 99.)

(3) Lettre à Alexandre Vinet, 7 oct. 1845. (Correspondance de Sainte-Beuve, C. Lévy, t. I, p. 120.)

(4) もっとも、かれは、この人生傍観の態度を人生蔑視という消極的な方向に押しやることはしなかった。むしろ反対に、すべてを採り入れ、すべてを批判し、すべてを消化するという、モンテーニュ的積極の方向に拡張することを望んだようである。ただし、それは実際には単なるデッサンにとどまりはしたけれども。

しかし、この《批判的知性の状態》・人生傍観の姿勢は、信仰探求を廃してのちのかれの生活における、思考・感情の唯一の拠点だったのであるか。かつての内的宗教へのあこがれは、かれから全く去ってしまったのであるか。あるいは、人生傍観の姿勢の中に、単なる思い出として閉ぢこめられてしまったのであるか。そうではない。けっしてそうではない。……いわゆる信仰探求は廃された。しかし、捨てられたものは、教会の宗教であって、内心のなぐさめとしてのそれではなかったのである。後者は、前者のもたらした、ある精神の荒廃をこえて、なお生きていた。年齢の持つ重みというか、ずぶとさというか、そういったものが若年のかれを責めたてたあのルネ的コンプレックスを心底深く埋もれさせてしまっていた以上、それはもはやコンプレックスの解毒剤としてはとらえられていなかったにしろ、一つの原始の欲求のごとく、かえってより純粋な形でかれにその存在権を要求し続けていたのである。1852年、つぎのように述べることによって、かれは、かかる欲求の自己における存在を確認している。

《キリスト教的感受性というものを持つ人々がある。わたしもそのひとりだ。質素なくらし、禁欲、曇った空、静思孤独の習慣、すべてかかるものがわたしのうちに忍び込み、わたしの心を和らげ、しらずしらず、わたし⁽¹⁾を信仰に向かわせるのだ。》

さらに、かれは、かかる感情に導かれて、キリスト教の諸倫理を教會的解釈を離れて尊崇することを道德上の絶対的要請とさえ見ようとする。「ポー

「ポール・ロワイヤル」で、かれは、かかる倫理観を最もよく代弁するものとしてのつぎのパスカルのことばを引用している。

「イエス=キリストについて予言が全くなかったとしても、かれが奇蹟を全く行わなかったとしても、その教説と生涯にはきわめて神聖ななにものかの存するゆえに、少なくともそれに魅せられずにはいられないし、またキリストへの愛なくしては真の徳も心の正しさもあり得ないと等しく、キリストへの賛仰なくしては、高い知性も繊細な感情もあり得ようものではない。」⁽²⁾ (下線イタリック)

これに続けて、サント=ブーヴは、つぎのように注を加えて言うのである。

「じじつ、キリストの来臨以来、人類の道徳は不信者ですら無視し得ぬ前進をとげた。すぐれて英雄的な魂の新しい理想が発見され、人々に提供されたのである。このことを絶対に否認する者はまさにそのゆえに罰を受けよう。(中略)なんびとたるを問わず、キリストを完全に無視した人の精神・心情にはなにかが欠けているのである。」⁽³⁾

(1) “Autres pensées” à a fin du t. III de “Portraits littéraires”.

(2) Port-Royal, Hachette, t. III, p. 451.

(3) ibid., t. III, p. 451. note.

人生懐疑の思想と、この絶対的倫理観。論理的には矛盾するこの二つの思想を、しかし、かれは、なにか一元的なものに弁証化する必要を認めなかった。それというのも、かれは、これらを概念的な思想としてでなく、その人生体験から由来した、いわば生活感情として受けとめていたからなのである。

結論を急ごう。「ポール・ロワイヤル」における前記二元論的論法は、実にかかる人生認識にその源をくんでいるのである。しかし、かかる考えかたに対して、人は、あるいは、この作品について一般に行われている性格規定、すなわち、これは作者の宗教体験の一つであって、しかもそれを否定的な結果に導く諸機縁をもたらした述作であるとするみかたを対置するかもしれない。⁽¹⁾では、ここで、若干の紙幅をかりて、このみかたに対するわたしの考えをあきらかにしておくことにしよう……。さて、この規定は、作者が研究の結語として書いたつぎの文章を直接の根拠とするものである。

「若いころ、不安で、病的で、もっとも隠微な場所に咲く花々を愛し、そ

れに好奇を寄せていたわたしは、信仰厚き人々の内面の秘密をその源泉にくむことによって、そこに息づいている、ひそかな・深い詩を集めようとした。しかし、わずかに歩を進めたばかりでその詩は消え、代わって、いっそうきびしい光景がわたしをとり巻いた。そこには、宗教だけが、キリスト教だけが、その峻厳・赤裸な姿で君臨していた。かかる宗教に対しては、わたしは、これを理解し、これを叙述することのためにしか、近づくことを得なかった。(中略) わたしの努力はむなしかった。わたしは、単なる探究者・真率で細心綿密であるだけの観察者にすぎなかったし、いまでもそうなのだ。⁽²⁾」

しかし、この文章は、実は、研究途上の宗教観変遷の経過を手がかりとして信仰探求に対する幻滅的感懐を述べるべく発案された、純粹に告白的性質の文章なのであって、そのまま作品の構造様式を説明するものではけっしてないのである。「ポール・ロワイヤル」の構造、それは、宗教に対する感性的傾倒→宗教への懐疑→そこからの脱却→観察家的視点の獲得、という、あるいは《批判的知性》による宗教感情の克服という、作者の精神遍歴の経路に研究そのものの諸段階をあてはめることによって、いいかえれば、この作品を作者の宗教観変遷の索引とみなすことによって、説明されることを得ないのである。もしそうでないならば、信仰精神の絶対視が終始この作品の叙述原理の一つとなっていることをどう説明すればいいのであろうか。

したがって、かかる事情を考慮することなく、結語の文章を作品構造の絵ときとして無条件に承認することから成っているらしく思われる前記性格規定は、それが性格規定であるかぎり、不十分かつ不当であると言わねばならない。真相は、研究整理の時期にすでに観察者的態度をみずからに擬してはいたが、なお教会なき信仰者としてキリスト教の倫理を絶対視せずにもいられなかった作者が、ポール・ロワイヤルとジャンセニズムを、一方は宗教の本質に関するもの、他方は単なる神学体系にすぎぬものとしてそれぞれ範疇化し、同時に、一方には護教家的な、他方には審問者的な態度をもって臨むことによって、その二元論的人生認識に叙述そのものを呼応せしめざるを得なかったということであり、結果的には、かかる操作が作品の構造様式を決定したということなのである。⁽³⁾

さきに若干触れたように、一つの論考においてこの種の論法をア・プリオリに設定することは、対象のあるべき真を逸したり、命題の立てかたに恣意的であったり、分析に徹底を欠いたり、あるいは自己満足的な感慨反芻に淫したり……などの弊をもたらしがちであり、この点では「ポール・ロワイヤル」も例外ではあり得ていない。それどころか、この作品は、ある意味では、かかる欠点を集中的に示していると言えらるるのである。論理的整正を追うことに急な読者ならば、そこに詩的混沌のみを見るかもしれないであろう。しかし、この作品は、単に、概念的論考・客観的歴史たるにとどまるものではない。これは、その構造の決定因子たる前記二元論的論法が作者の生活の場における自己認識から直接に発想されたものであることによって、一つの精神の記録としての性格を濃厚にはらんでいるのである。そして、かかるものとしての「ポール・ロワイヤル」が、読者に及ぼす、ほとんど肉体的とも言える粘着的迫力こそ、上にあげたような諸欠陥をこえて、この作品の積極的・⁽⁴⁾絶対的な価値をかたちづくるものであると言わねばならない。

(1) cf. Gustave Michaut; Sainte-Beuve, Hachette.

Victor Giraud; Port-Royal de Sainte-Beuve, Méllottée.

(2) Port-Royal, Hachette, t. VI, p. 243-4.

- (3) ひとたびこのことを理解するならば、読者はこの作品の細部の叙述もかかる構造様式に微妙に滲透されていることを容易に発見しうるであろう。一例をあげれば、もつとも信仰に熱していたときこそもつとも深刻な懐疑におそわれていたときであるという、パスカルの信仰様式に関するサント=ブーヴの有名なテーゼがそれである。これは、従来はパスカルの信仰に関する浪漫的解釈の典例として取り扱われてきたにすぎない (cf. Emile Boutroux; Blaise Pascal)。しかし、これは単なる解釈ではなく、サント=ブーヴ自身の信仰そのものに対する考えかたの間接的表白なのである。
- (4) サント=ブーヴの批評が、いわゆる批評であるよりも、むしろ批評的型態をとった創作あるいは告白であるといわれることの根拠の一つを、ここに求めることができるであろう。しかし、このことに関しては、将来テーヌについて述べるさいにあらためて言及したく思う。